

Librairie du Liban.

Farraj, Johnny and Sami Abu Shumays. 2019. *Inside Arabic Music: Arabic Maqam Performance and Theory in the 20th Century*. Oxford: Oxford University Press.

(竹村 和朗 高千穂大学人間科学部准教授)

石原美奈子(編著)『愛と共生のイスラーム——現代エチオピアのスーフィズムと聖者崇拜』(南山大学学術叢書) 春風社 2021年 550頁

本書は、ティジャーニー教団の聖者であるアフマド・ウマル(1891/92–1953)の人生を主軸とし、20世紀以降のエチオピア西部オロモ社会において、愛と共生のイスラーム共同体がどのように形成され、政治・社会的状況に応じて形を変えながらも現在まで受け継がれてきたかを描いた民族誌である。著者らが1992年以降、現地でのインタビューと参与観察、文献調査を精力的に行った成果として編まれた本書は、日本語でエチオピアのイスラームについて詳しく知ることのできる、初の学術書でもある。

本書は全4部、12章(序章と終章、本論10章)で構成されている。第I部から第III部までは、編者である石原美奈子氏が、2009年に東京大学に提出した博士論文の内容を元としている。続く第IV部は、松波康男氏と吉田早悠里氏が各1章を担当し、アフマド・ウマルの影響を受けた社会がどのように変化して今日に至っているかを論じている。以下、各章の内容をみていこう。

序章は、19世紀以降のエチオピアの歴史背景とイスラームに関する先行研究を取り上げ、本書の位置付けを明示している。植民地支配下、キリスト教徒が多数派を占めるエチオピアにおいて、ムスリムが宗教実践を維持するためには、イスラーム社会の理想を追求するよりも、「非イスラーム的要素・集団との『共生』を重視すること」(p.59)が必要とされた。そのような社会的状況下、西アフリカからエチオピアにやってきたアフマド・ウマルが、いかに宗教の垣根を超えて敬愛される聖者となり、「愛と共生のイスラーム」を実現し、彼の教えが後世へと受け継がれたのかについて、本書は示している。

第I部「西部オロモ社会とイスラーム」は2章で構成されており、オロモ社会の歴史と宗教、エチオピア南西部ジンマ地方のイスラーム化について説明している。第1章は、オロモが移動拡散し、いかに他民族をオロモ化しながら土着化していったかを示している。また、超越神ワカへの信仰や精霊信仰、人間と神の間に仲介し、精霊と交流することができる者を崇敬するというオロモの宗教的伝統が、アフマド・ウマルを崇拝する慣行の基礎となったことを指摘している。

第2章は、ジンマ地方におけるイスラーム化の進展について、3段階に分けて整理している。第1段階は、18世紀にジンマ地方を征服したオロモがギベ5王国を建国した際、王が改宗するとともに、イスラーム学者を庇護し、イスラームの普及活動を支援した時期、第2段階は、19世紀後半、エチオピア北部でのキリスト教勢力の拡大や、スーダンのマフディー運動の影響、他地域からのイスラーム学者の流入が目立った時期、第3段階は、19世紀末から20世紀初め、ギベ5王国がエチオピア帝国に編入されてキリスト教体制となり、イスラームの政治的イデオロギーの有効性が失われた際、様々なスーフィー教団が到来し、オロモの間でスーフィー教団への加入が流行した時期である。

第II部「カリスマの誕生」は3章からなり、西アフリカからやってきたアフマド・ウマルが、どのようにオロモ社会に受け入れられ、聖者として崇敬されるようになったのかを論じている。第3章は、アフマド・ウマルの人生の前半期を取り上げている。アフマド・ウマルの伝記によると、彼は西ナイジェリア北東部のボルノ地方で生まれ、幼少期には覚醒状態で預言者ムハンマドと対面している。そして、19歳の時にマッカ巡礼を果たした後、天命に従ってエチオピアに向かった。ベニシャング王国に滞在した際、ティジャーニー教団に加入して導師となった。また、ウォッレガ地方西部ケレム行政郡に滞在した時は、病を治療する薬師として活躍し、キリスト教徒にも受け入れられていたことを明らかにしている。

第4章はアフマド・ウマルの人生の中盤期、エチオピア南西部に位置するオロミア州ケレム・ウォッレガ県ミンコ村において、聖者として人々に受け入れられるまでを描いている。1930年代前半、アフマド・ウマルは呪術を操り奇蹟を起こす者として、またティジャーニー教団の導師としての名声を得ると、国内外から

突は起こらなかったことが示されている。

第10章は、アフマド・ウマルの子の一人であるアブドゥルカリームに焦点を当て、アフマド・ウマルへの敬愛や共生の教えがどのように変化し、今日に受け継がれているのかを論じている。トリ集落の住民たちは、アブドゥルカリームをアフマド・ウマルの子として敬愛し、支えてきた。そして現在のアブドゥルカリームの仕事が、共生と融和を説き、世界平和を願って祈禱をあげることで、世界の縮図とされるトリ集落の平和を保ち、それによって世界平和を実現することにあると指摘されている。

終章は、全体の要約とともに、アフマド・ウマルの寛容さや聖者性から、愛と共生のイスラームが実現され、さらに子孫たちに受け継がれ、その時々時代に合った形が模索され続けていると結論づけている。

以上、全体を概観してきたが、本書の意義深い点としては第1に、ティジャーニー教団の新たな側面を提示したことが挙げられる。元来、ティジャーニー教団が排外的特徴を持つことは、第2章でも指摘されている(p.158)。しかし本書は、アフマド・ウマルの登場によって、ティジャーニー教団が面的な広がりをもせた事例を示した。教団普及の一因である導師たちによる病氣治しが、他の教団にも見られるのかについて今後比較検討されれば、病氣治しがエチオピアのティジャーニー教団独自の特徴であるのか、あるいはエチオピアのタリーカの特徴であるのか、明らかにされることが期待できる。

第2に、アフマド・ウマルの聖者性についてである。サハラ以南アフリカでは、タリーカが植民地闘争の中核を担い、植民地政府とは敵対関係にあった例が多い。しかしアフマド・ウマルは、相手が誰であっても無償の奉仕を行い、植民地政府の関係者に対しても献身的に奉仕し、友好関係を保った。このように、非暴力的な「戦略」を駆使することでムスリムコミュニティを守ったという事例は、イスラームの聖者像の新たな側面を提示したといえる。

第3に、第IV部が、第I～III部のアフマド・ウマルを中心とした内容を受けて別の視点から考察し、本書の内容に更なる深みを持たせている点である。別の視点というのは、第9章ではヤアのムスリム・オロモト、ヤア周辺の民族との衝突回避、第10章では世界の平和の実現という、共同体の外に開かれたアフマド・ウマルの影響力である。このことは、アフマド・ウマルの影響力が、消滅するのではなく、時代の流れに合わせて変容し、受け継がれていることを示している。松波・吉田両氏の研究によって、今後の変化も明らかにされることが期待できる。

以上のとおり、本書の意義は十分に大きい。一方で気になった点は、スーフィーヤとワハビーヤの関係性についてである。本書では、近年増加傾向にあるワハビーヤが、スーフィーヤに対して敵対的態度を取ったり、聖者崇拝やスーフィズムを批判したり、数々の事件を引き起こしたりしている事実が述べられている(pp.398-401)。その一方でスーフィーヤ側からみたワハビーヤについての記述は、わずかな外見的特徴や態度、性格のみに留まっている(p.401)。本書の主題がスーフィズムや聖者であることを考慮すると、スーフィーヤ側から見たワハビーヤに対する考えや対応、発言について、より詳しく言及され、精緻に考察される必要があるであろう。特に、ヤア村とトリ集落の今日的状況を取り上げた第IV部に、スーフィーヤとワハビーヤの現在の関係性が考察された上で、愛と共生のイスラームが実現されていることが示されていれば、本書の結論はさらに説得的になったであろう。

とはいえ、本書は著者らの長年のフィールドワークと文献研究による成果の賜物であり、サハラ以南アフリカのイスラーム研究を大きく進展させたことに疑いはない。アフマド・ウマルから受け継がれた今後の聖者性の形や、周辺各地のタリーカや聖者廟との関係性など、本書から広がる研究の可能性は尽きない。今後のより一層の研究の進展を期待したい。

(藤井 千晶 学振特別研究員(RPD)・
大阪大学外国語学部非常勤講師)